

戦後生まれの私にとって、あの第二次世界大戦自体は遠い存在であるものの、その後もずっと尾を引く家族の悲嘆や苦労をふり返ると、我が家の重大な出来事だったと痛感します。

私の父・栗原仁一は大正 11 年（1922 年）1 月 5 日生まれ、叔父・栗原政二は大正 12 年（1923 年）6 月 1 日生まれで、仲のよい年子の二人兄弟でした。学徒出陣が始まる昭和 18 年頃は兵士不足がいよいよ深刻化したらしく、彼らが 20 歳を迎えるとすぐ、立て続けに召集令状が届きました。

1 年前の 18 年 2 月に出征した兄のあとを追って弟の政二が入隊したのは昭和 19 年 6 月で、2 か月後の 8 月 10 日にはもう、陸軍特殊貨物船「玉津（たまつ）丸」に乗船。ヒ七一船団として僚船 19 隻、護衛航空母艦「大鷹（たいよう）」を含む 8 隻と共に、午前 5 時に伊万里湾を出発、マニラに向けて航行中の 18 日夜、ルソン島北西沖で出し抜けに敵潜群の猛攻を受けたということです。同航船が次々と撃沈される中で、必死懸命の避航を繰り返した「玉津丸」だったが、ついに 19 日の 4 時 30 分頃、米潜水艦（SS-411・Spadefish）からの魚雷 2 発を右舷中央部に受けて約 10 分後に沈没した。北緯 18 度 49 分、東経 119 度 47 分、ルソン島北部・ボヘアドール岬西北西 90km 付近の惨事で、当夜の海上は暴風のために大波が逆巻き、脱出した者も大半が海没した。この時の乗船部隊は、第 26 師団独立歩兵第 13 連隊の主力 4,000 名で、船員 135 名、部隊 4,620 名が戦死したという（日本海運組合戦没資料館より）。台湾とフィリピンの上に位置するバシー海峡は、戦争末期、南方に向かう船舶が、米軍潜水艦の魚雷により撃沈され“魔の海峡”、“輸送船の墓場”、と恐れられ、少なくとも 10 万人、最大で 26 万人の犠牲者が眠っていると言われます。私の叔父・栗原政二もまたその一人で、入隊してわずか 2 か月半、齢も 20 歳 2 ヶ月という若さでした。

一方の父は、弟が南の海で戦死したことなど全く知らずに旧満州・大連の港湾守備の役務に就いていましたが、やがて千島列島のどこかの島の守備隊として転戦。その地で昭和 20 年 8 月 15 日の終戦を迎えるはずでした。ところが、ここでの戦闘は続き、後に“知られざる激戦”、と呼ばれる“占守（しゅむしゅ）島の戦い”に巻き込まれることになります。それは、8 月 18 日～21 日に行われたソ連労働赤軍と大日本帝国陸軍との戦闘のことで、日ソ中立条約を一方的に破棄したソ連が、8 月 18 日未明に占守島を奇襲攻撃。日本軍優勢だったものの、21 日に軍命により日本側が降伏して停戦が成立。日本軍の武装解除は

23日と記録されているが、父の記憶では事実上の武装解除は9月に入ってからだったようです。そして捕虜となった日本兵は法的根拠もなく拉致されてシベリアへ抑留されました。

停戦でやっと日本に帰れると喜んだがそれは大きな勘違いで、シベリア抑留生活4年間の過酷な強制労働が待っていたのです。乗った船は沿海州のどこかの港に着き、列車で運ばれて大陸の奥地へ。沿線の風景がだんだん見慣れぬものになったが、到着したのがどこの収容所かもわからなかったようです。課せられた使役は森林の伐採や鉄道の敷設。言葉では言い尽くせないほどの過酷さに加えて、粗末な食事と厳しい寒さが捕虜の身を蝕みました。長い冬は極寒の連続で、零下30～35度にならないければ作業の中止はなく、その重労働と栄養失調のために多くの戦友が次々と死んでいったが、その遺体はすぐ凍りつき、永久凍土の地面は深い穴が掘れず、ただ雪をかぶせるだけの埋葬だったそうです。その体験事実があまりに酷かったせいか、帰国後の父も戦友の方も、一様に固く口を閉ざしてあまり話したがりませんでした。

抑留を終えた父は舞鶴に帰国して、まっすぐふるさと島田へ。親戚や地域の人達が大勢島田駅まで迎えに出ましたが、その時の感激は忘れられないと、95歳の天寿を全うするまで、事あるごとに話していました。しかし、父の苦労は帰郷したこの時に終わったわけではありません。その原因が、目まぐるしく変貌した戦後4年間の日本の世相との戸惑いや、収容所でたたき込まれた異国の思想とのギャップにあったのかもしれませんが。自分の確かな居場所を定められず、どことなく肩身を狭くして孤立していたように思えてなりません。極寒に耐えて死に直面した経験から決して弱音を吐かない人でしたから、かえってそれが気の毒でした。

20歳そこそこで2人の息子たちが相次いで召集された祖父は、男手のない家族と、名古屋からの疎開家族（従弟と小学生・中学生の二人の子供）を抱えることになってしまいました。戦中の家を守り祖母と伯母とで行う農業は作業が追いつかず、地元青年団の奉仕や地域の援助のおかげでなんとか生業を維持していましたが、弟はすぐに戦死し、兄の方も出征後6年以上経っても生死不明の状態が続いたわけで、その空白は戦後もなかなか埋まらず、歪みがずっと残る結果となりました。

たいした護衛もない輸送船・玉津丸の船底で多くの仲間たちと沈んでいった叔父・栗原政二。戦争末期、同じように戦わずして死んだ若い命がどれほど多かったかを想像すると、彼らの死が犬死ではなかったかと思えてなりません。

父・栗原仁一の過酷極まる4年間の抑留や、そこで息絶えた無数の戦友の死もまた無駄死ではなかったか。私の生まれる前の出来事ですが、あまりにも悲惨過ぎたと今でも痛切に思います。

80年前、満州や南方に資源を求めて侵略し、世界の制裁を受けて孤立し、打開策として真珠湾への奇襲を行ったことで、第二次世界大戦を引き起こした日本。その結果が広島・長崎の原爆投下につながり、戦争の悲劇を生み出しました。戦争は必ず「人の死」の上に展開されます。2022年、ロシアのウクライナ侵攻が始まり、その攻防が連日のように伝えられる中、これが第三次世界大戦にならないことを願うばかりです。

### 戦中・戦後の我が家

島田市遺族会 鈴木政亮

私は昭和16年6月生まれ。12月8日、日本軍が真珠湾を攻撃した時を戦争が始まった日とすれば、戦前生まれと言うことになるが、なにせ終戦の時やっとなにせ4歳と2か月ということで、戦争中の記憶は何もないと言っても過言ではない。ただ一つある記憶は、昭和20年7月26日の空襲で、B29から投下された爆弾が破裂した時のことだ。昭和18年の7月ごろ父「弘」の戦死公報を受け取っていた母は、実家の百姓の手伝いをして自分と私の生活を何とかやりくりしていた。その日は朝からいい天気で暑い日だったが、私の祖父母・母と母の姉妹総出で田の草取りをしていた。

私は、田んぼの畔でイナゴを捕まえて遊んでいたと思う。当時艦載機は別として、B29は島田の超上空を素通りするのが普通だったので、B29が飛来しても、防空壕に飛び込む等それほど神経質に反応していなかったような気がする。

草取りの手を休めて、上空を眺めていた祖父が「B29が風呂桶位の大きさの何かを落とした。爆弾だ、家に帰って防空壕に入るぞ」と言って家に向かって走り出した。私は、祖父の背中で、爆弾の落とされた東の方を見ていたが、大きな花火が地上で破裂したような景色だった。(不謹慎だと思うが、すごく綺麗だと思った。)市役所に勤務するようになって知ったことだが、島田に落とされた爆弾は、長崎市に落とされた原子爆弾の模擬爆弾だったそうだ。北陸の某市で実験をする予定だったが、天候の都合で実験が出来なかったので、帰りの機体を軽くするため適当に落としたのが島田だったと言う事らしい。

爆弾を落としたり、大砲を撃ったりする戦争はその年の8月15日に終わったが、自分たちの戦争は、その時から始まったと言っても過言ではない。世間

一般では、食べるものも着るものもなく、住むところもない人であふれていた。それでも私の所は、住むところは父が出征する前に確保してくれてあった家が空襲にも合わなかったし、食べ物は母親の実家が農家だったので、全面的な援助を受けることが出来て、それほどひどい思いをしたことはなかった。しかし、何にしろ現金収入が無かったので、それまで専業主婦だった母親には厳しいものであったように思う。特別な資格（例えば、看護婦とか教師とか言うような…）を持たなかったので、安い賃金で力仕事に携わるしかなかったようだ。（15年程度勤めた給料が、私が高校を卒業して貰った初任給より少し多いだけだった）

ある時、夕飯を食べながら、母親がこんなことを言った、『〇〇のばあさんが、「あんたんちうちはいいネ。旦那さんが戦争で死んだもんで国からお金が貰えるで…」だと。頭にきたので私は言ってやっただよ。「ほんとにそうだよね。お宅のお父さんも戦争で死んでくれりゃよかったのにねえ…」と』、本当に悔しそうだった。〇〇のおばさんは、私も知っている人で、普段はそんなことを口に出すような人とは思えなかったが、旦那さんはそれ程稼ぎもなく、子供が4人もいる状況では、本当にそう思ったのだろう。

私たちが小学校に通い始めたころ、1クラスは55人か56人くらいだった。その1クラスに、少なくとも6～7人は戦争で父親を失った子供がいた。そうした子供の中の一人に、給食の時間になるといつも教室を出ていってしまう子供がいた。「給食はそれ程美味しくはないので、家に帰って自分の好きなものを食べてくるのだな。」と単純に思い込んでいたが、実際はそうではなくて、給食費が払えないので、給食の時間は教室から出ていくのだと知った。自分よりも厳しい生活をしている人がいることを実感した瞬間だった。ヒガミ根性が絡んでの事かも知れないが、小学校の教室の中にも貧乏人の子供であるが故の差別があったような気がする。（喧嘩をしても先生に叱られるのはいつも貧乏人の子供と相場が決まっていた。…「△△のお父さんは先生の所へ付け届けをしているので、少しくらい悪いことしても叱られないんだ」というようなことを言う貧乏人の子供がいた。）

一部の特別な人を除けば、学校の先生のお宅も含め、各家庭が本当に貧しかったと思う、特に大黒柱である父親を戦争で亡くした家庭には厳しいものがあったように思う。

「父親が居てくれたら…」と思ったことも何度も何度もあって、原稿用紙が何枚あっても足りはしないが、今この年になって、平穏でそれ程みすぼらしく

ない生活が出来ていることに感謝したい。でも、私の戦後は私の呼吸が止まるまで終わったとは言えないと思う。